私と今までの留学経験

-イギリス、フィンランド、香港の学生生活を通して-

トゥルク大学教育博士課程
公益財団法人AFS日本協会
上條 未央
Mio Kamijo

イギリス留学を思い立つまで

私が初めて留学を決意したのは短大の卒業を目前にしていた時で、既にあれから15年前のことになります。当時は、経済、統計、会計学を学び、私も人並みに就職活動をして仕事に就くものだと思っていました。ただ、就職活動をしていく中で気付かされたのは語学力の乏しさでした。英語は中学生で初めて触れて以来一番苦手な科目の1つでした。今程の就職難ではなかったものの私たちの世代は、第2次ベビーブームであったこと、また、バブルがはじけてしまった後であったこともあり、就職をするには大変厳しい時期で就職を勝ち取るには語学力が不可欠でした。そんな状況の中、私は今までにない屈辱を味わい、自分にさえ自信を失いかけておりました。ただ、英語が不得意だからといって逃げてしまう自分はもっと屈辱的だったので、どうしても語学力を真剣に身につけたいと思うようになり、進路担当の先生、両親、大学の先生に相談をし、私に一番良い方法はないのか色々と模索しました。そんな時、当時私が通っていた短大がイギリスのケンブリッジ大学と提携を結び、同校へ留学を希望する学生を捜していました。私は、この機会を利用し留学をしたいと志願しました。まだ提携を結んだばかりであったので、私を含めた学生3名は、大学だけではなく大使館を交えた交流会やチャリティーイベント等、今までに体験がないような比較的大きなイベントを実行する側に立つことも出来ました。当初、私の語学力はゼロからの出発だったので、コミュニケーションをはかるにも乏しく、大変苦労をしましたが、多くの方々にも支えて頂きました。特に、英語を英語で勉強をするという環境に飛び込んではみたものの先生が何を指示しているのか分からず、予習をして授業に出ればついていけるというレベルになるにも半年くらい掛かりました。その間、私は、日本で英語の教師をしていた恩師に毎日、語学学校の授業が終わると日本語でも文法の指導をして頂きました。また、当時住んでいた寮の受付スタッフのお母さんが、私が英語で苦労をしているということを聞き、週に2回のプライベートレッスンを快く引き受けてくれました。こうした恵まれた環境の中、私としても期待に応える為、時間を惜しまず英語漬けの毎日を過ごしてきました。私の部屋の目につくところに、英語の単語や表現が書き出された付箋紙を貼り、常に確認が出来るようにしましたし、日本から持ってきた英語の辞書も全て読み込み、重要な点を一つ一つノートに書き出す作業をしました。ただ、こうした積み重ねが、本当に自分に身に付いているのだろうかと不

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

安になり、自分で留学を切り出したものの、気がつくと公衆電話に走って両親へ泣き言を言っていた時もありました。ただ、そんな時も両親や身近にいた友人たちは、私を励まし続け勇気づけてくれました。だからこそ、中途半端な状態では日本には帰れないと思い、一時帰国は絶対に留学してから1年後だと決めていたので、それまではどんなに辛くても逃げ出さずに自分に向き合うことが出来ました。しかし、苦労だけではなく、大変良い経験と思い出をつくることも出来ました。ケンブリッジという町には、私と同じように多くの留学生がいました。私は、ケンブリッジ大学の中のニューホールカレッジという寮にいましたが、そこで素敵な出会いをすることが出来ました。マレーシアから留学していた彼女と私は、同い年で気が合ったこともあり、私は彼女に日本語を教え、彼女は私の苦手であった英語での会話の練習相手となり交流を深めるようになりました。ケンブリッジにいる間、彼女とは切磋琢磨しながら一緒に勉学も励ましあいながら毎週末図書館で勉強していました。また、勉学だけではなく、彼女と一緒に大学でクッキングサークルを運営し、各国の料理を楽しみながらその国のことを知ろうという企画を提案し、1カ月に1回イベントをするようになり、私が大変苦手としていたコミュニケーションをとることに対しても少しずつ慣れることが出来ました。ただ、寮での生活は、大変居心地のいい環境でしたが、自分の部屋に閉じこもってしまうと英語で会話をする機会が少なくなってしまうので、寮を出てホームスティに切り替える決意をしました。私は、イギリスに初めて留学した当初1カ月間だけホームスティをしておりましたが、そこでも運命的な出会いをすることが出来ました。私の初めてのハウスメイトはフィンランドからの留学生で、当時彼女は10代の大変若くてシャイな女の子でした。彼女は、私と違って英語が堪能でホストマザーやホストファーザーと沢山のことを話している様子でしたが、私は、「食べる」、「寝る」、「学校へ行く」という簡単なことを話すので精一杯でした。そんな中でも、そのファミリーは大変温かく私も迎えてくれ、また、ハウスメイトと同じ学校だったこともあり、仲良くしてくれました。その彼女とは、また再会をすることになるのですが、そのことは、もう少し後で詳しく書こうと思います。私が寮を出て、語学だけでなくもう少しアカデミックな勉強をする為にビジネスのコースに入ってから、ホームスティを1年半していましたが、そこで出逢ったホストマザーは、私にとって今でも強く影響されているように思います。私が彼女に出逢った時には、既にWHOでの通訳を引退し、自宅で出来る翻訳業をおこなっていました。彼女は、イギリス生まれですが、両親の仕事の関係でスイスに住んでいたこともあり、若い頃から色々な言語を話せる方で、8カ国語を自由に操っていました。彼女は、中国で少しの間、翻訳の講師として教壇に立っていたこともあり、私にも言語について沢山のことを教えてくれました。彼女は、語学はこつこつ毎日積み重ね努力するしかないと常々言っていました。私の勉強も以前と違いビジネス系の専門用語が増えてきた為、彼女に手伝ってもらい毎日トレーニングをしてもらうようになりました。ファイナンシャルタイムズの記事を毎日要約し、彼女に添削してもらい、RとLの発音が苦手であった私に時間がある時に、音読の練習に付き合ってもらいました。彼女自身、語学を学ぶ難しさを知っているが

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

為に、逆に厳しいことを言われることもありましたが、私にとって一番有意義な時間を過ごすことが出来た時期でもありました。本当に彼女に巡り会えたことは幸せなことで今でも尊敬しています。昨年亡くなるまで彼女はずっと語学に携わり、私がどこにいてもメールで近況を知らせ、また、叱咤激励を最後までしてくれました。本当に感謝に尽きません。

その後、日本に帰国し、一旦仕事に就いたものの、苦労して学んだ英語に携わったことで言語における異文化コミュニケーションについて深く学びたいと思う気持ちが強くなり大学に編入することを決意しました。信州大学での2年間は、目的がはっきりしていたので、毎日が大変充実をしていました。また、在学中に中学、高校の英語教師の教員免許を取得しました。自分が言葉で苦労したので、英語を通してこれからの若い世代に楽しさを伝えたいという思いからでした。

2度目の留学～フィンランドと私の関係

私は、大学卒業後、一般企業に勤めましたが、いつか教育の世界へ戻りたいと考えていました。また、毎日の業務の中でも、外国語能力の需要が増えてきていると感じ、その傍ら、日本の外国語教育に対して疑問を抱くようになりました。丁度私が教育について考え始めた頃、フィンランドの教育が日本のメディアで沢山取り上げられるようになり、フィンランドの教育とはどういうものであるのか自分でも体験をしてみたいという気持ちが強くなり、前述の私がイギリス留学で知り合ったハウスメイトを通して、フィンランドの現地の大学の情報を集めるようになりました。私が探し始めた頃はまだ、フィンランドの情報は大変少なく、彼女が色々と助けてくれました。そんな時、大変興味深い大学院のコースをトゥルク大学で見つけ志願してみることにしました。アカデミックな世界から少し離れていたので、感覚を取り戻すまで大変でした。先ず、志望動機を英語で準備し、英文の成績証明書を卒業した大学に発行依頼し、語学力証明書を提出する為、International English Language Testing System(IELTS)の勉強をしました。海外の大学院を受験するには、殆どの場合、語学力証明書が必要になる為、日頃から語学力を磨いておくと良いでしょう。私は、大学院留学をするまでに1年間の準備期間を設けました。また、最近は、多くの大学がオンラインで出願書類を提出する方法を利用しているので、パソコンでの作業にも慣れておくと良いでしょう。こうした準備期間を経て、無事にトゥルク大学へ入学することができました。

フィンランドでの研究内容

2007年から2009年までトゥルク大学の大学院で外国語教育について比較研究を行いました。私の研究対象は、フィンランドの英語教育で、主に、どのように英語教育の見直しを行ってきたのかを教科書を使って分析しました。フィンランドは、40年もの歳月をかけて教育の見直しを行ってきたのですが、英語教育においても例外ではありません。何故、私がフィンランドと日本の英語教育を比較対象に選んだのかといえば、フィンランド語は、英語と同じようにアルファベット表示ですが、フィンランド

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

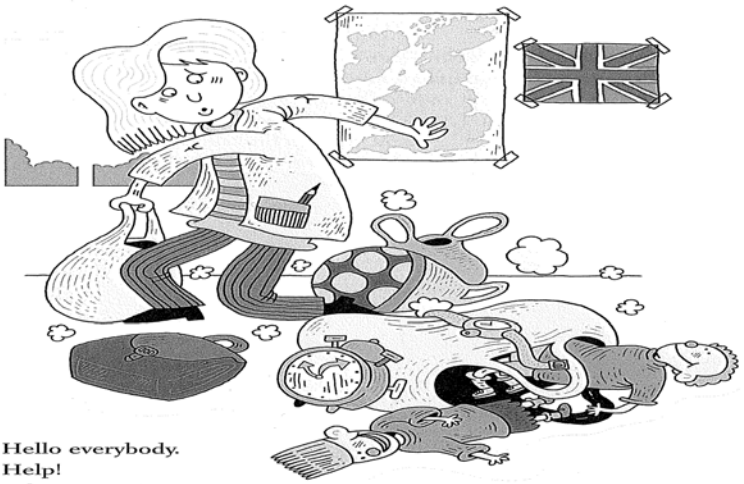
語の言語の特性から、日本の外国語教育にも役立つのではないかと考えました。ここで言うフィンランド語の特性とは、英語は、ゲルマン語がルーツとなっていますが、フィンランド語は北欧諸国の中でも珍しく、ゲルマン語がルーツではないということと、日本語と同じようにローマ字読みで発音が出来るということです。

フィンランドは、日本と違い、公用語が 2 つあり、フィンランド語とスウェーデン語が使用されています。スウェーデン語は、英語と同じゲルマン語がルーツとなっていて、フィンランド人の英語教育に影響を与えており、外国語を勉強する上で、大変恵まれた環境であると言えます。また、フィンランドのテレビは、外国のプログラムをそのままに流し、字幕スーパーで、フィンランド語とスウェーデン語が表示されます。若い世代は、英語でテレビゲームを楽しんでおり、日本と違って、翻訳されたものを使用するのではなく、日頃から母国語以外の言語に小さいうちから触れているのです。

私がおこなった教科書分析で分かった日本の英語教科書との大きな違いは、教科書の中では、殆どフィンランド語を記載することがありません。その背景には、フィンランド語は、Y と J の発音が英語の発音と異なり、その間違いを未然に防ぐ目的があります。しかし、日本の教科書の殆どは、登場人物も日本名であり、また、様々な箇所で日本語が使用されています。フィンランドの 9 歳から 12 歳時の使用する英語の教科書は、文法のルールにそった表記にこだわっておらず、それよりも、その年代に合った会話ができるように構成されていました。それに対し、日本の教科書は、改善をしているもののフィンランドで使用されている教科書に比べると未だに、文法を忠実に表記しています。もちろん、文法を勉強する事は必要となりますが、もう少し年齢にそった会話文を日本の教科書へも起用する検討をしてもいいのではないかと感じています。特に、英語を初めて導入する時期はより簡単に表現できる言葉を繰り返し、新しい言語に慣れるということの方が大切なのではないかと考えます。日本の英語教科書とフィンランドの英語教科書の大きな違いといえば、フィンランドの教科書は、絵本や子供用の本を読んでいるように作られていることです。また、異文化の教育の一環として、フィンランドの教科書では、多くの主人公が動物であったり、外国や想像上の国でストーリーが展開するのと違い、日本の教科書は、常に日本を視点としてストーリー展開がされるということも今回の調査でわかりました。2011 年より、日本も 9 歳から英語教育が開始されているので、私の研究が、少しでも日本の外国語教育に貢献できたらと考えています。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

フィンランドの教科書（例）

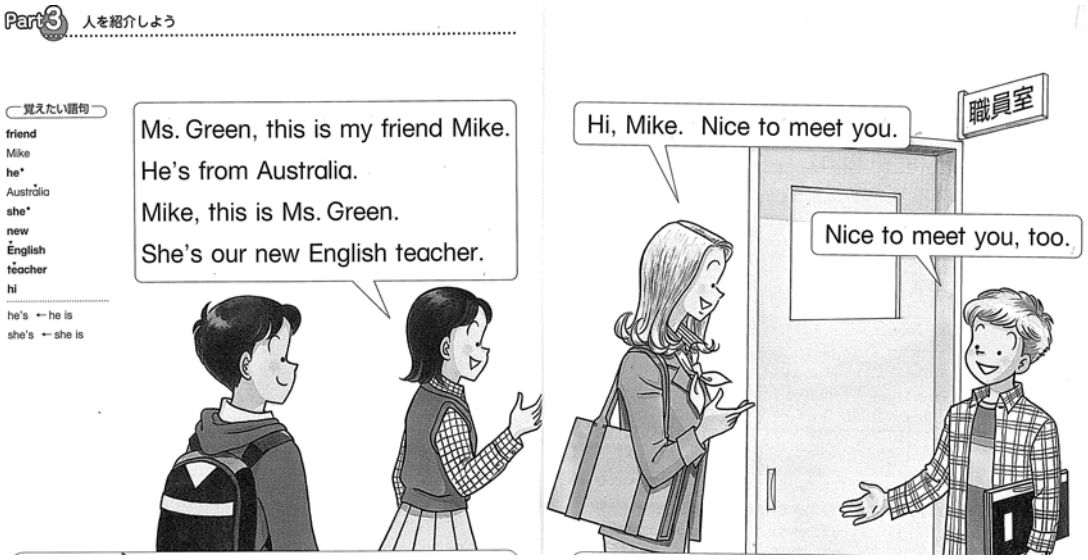


Woman: Hello everybody.
Help!
Tom: Who are you?
Woman: I'm Miss Sue Case, your new English teacher.
Tom: Good morning, Miss.
Woman: Good morning. Is this class three?
Tom: Yes.
Woman: Oh, good. And what's your name?
Tom: I'm Tom.
Woman: Nice to meet you, Tom. And you are . . . ?

33

Source: Holobek, Chris., et al., What's On? 3 Read It. Jyväskylä: Gummerus Kirjapaino Oy, 2005. 33.

日本の教科書（例）



Source: Krashima, Junichi., et al., NEW HORIZON English Course 1. Tokyo: Tokyo Syoseki Ltd, 2008. 18-19.

フィンランドと香港留学

フィンランドの教育システムは、自ら学ぼうとういう姿勢のある学生の願いを平等に受入れ、私自身も、実際にフィンランド留学中、大学からの補助金の負担を受け、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

現地の学生と同じ待遇で香港への交換留学の機会を得ることが出来ました。こうしたシステムは、大変素晴らしく、感動すら覚えました。香港の大学のレベルは大変高く、授業も全て英語で行われる為、香港の学生は英語が出来なければ香港の大学で勉強をすることはできません。香港はイギリスから返還された後も、教育において、特に大学レベルにおいては、イギリスの教育システムが強いような気がしました。授業のスピードも速く、学生も参加意欲が高いので討論の授業は活発で、良い刺激を受けることが出来ました。また、香港で使用されている英語の教科書を調べる授業では男性、女性の役割としての固定概念がはっきりしていることが分かりました。例えば、先生と言えば男の先生の写真であったり、女性はピンク色の洋服を着ている絵の冊子が使用されていました。香港では、ほぼ英語で生活が出来ますが、日常生活の多くは広東語が使用され、中国本土からも多くの留学生を受入れているので、中国語も使われていました。生活環境は、土地が狭い為、寮の部屋もかなり狭く 1 つの部屋を 2 人でシェアし、現地の学生は基本的に自宅から通うようになっています。色々な国での生活を経験しましたが、国によってそれぞれの環境、状況が違い、現地での生活を通して感じてみないと分からないことも多くあり、3 つの国で生活が出来たことは、私にとって大変良い機会でした。

今後について

2010 年より関西日本・フィンランド協会より奨学金をうけ、トゥルク大学博士課程にて修士論文を掘り下げて研究を続けていました。現在は、日本に戻り、公益財団法人 AFS 日本協会で高校留学の支援をしながら、自分の研究を継続できるよう担当教授とも話を進めています。私の所属する博士課程には期限がないので、機会を見ながら少しずつ自分の研究を進め、学術的にも日本の英語教育に貢献できれば良いと考えています。イギリス留学以来、私は、苦手であった英語とずっと付き合い、英語を通して沢山の素晴らしい仲間を増やすことが出来ました。内向きや夢を持たない若い世代が増えているとメディアでは取り上げられていますが、私は、留学も勉学も各自のタイミングはあるかもしれませんが、決して遅いという時期はないと考えています。ただ、何事においても諦めずに自分が納得いくまで向き合っていくことが一番大切ではないかと感じています。最後に、私から留学に関するアドバイスは、留学は、準備を始めるところからが留学です。特に、準備をしっかりしているかしてないかで自分の留学経験の充実感も変わってきます。是非、人に頼るばかりでなく、ご自身が納得のいくまで正しい情報を収集し、留学準備に備えてください。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.